

寛政期における 津輕藩の農民政策

田村 喜拉

序論

本稿においては、天明三拜の大火作以後、寛政を中心として、津輕藩の財政状態や藩内の実状をみる、それと関連させて主に荒廃田開墾についての農民政策の一面を覗いてみたいと思う。

尚、本稿は、ほとんど津輕藩日記に基づいて書いたもので、資料としては漁政者側のものに片寄ったきりがあるが、他に適当な資料が見当りなかつた爲、止むを得なかつた。

藩日記よりの引用文は、文中にそのまま引く事とし、別に註は着^付けないのでその失予めお断りしておきたい。

先ず始めに、寛政期の津輕藩が如何に財源の調

達に苦勞したかをみることにする。他藩同様に津輕藩も御常用金や諸事の経費の調達は四苦八苦といった所で、江戸、大坂の銀主から屢々借金し、更に家中の土への扶持米、給鰯より四分の一又は三分の一を差引いて給するなど、常々その場の出金に頭を痛めていた。それを如実に物語るものは、藩が横年取続方で頼っていた大坂の蔵元である山崎屋藤藏、茨木屋和助への書翰である。

今その重要處を掲げると、次の通りである。

「江戸表常用金の歳去冬石郷岡徳左工内宛坂の上御取組及御懸合候の処被_レ尽御精切江戸上方共常用金月割ニ而當六月迄御出銀被_レ下候ニ付可也ニ凌方茂相立家老共初拙者共迄大慶篤に候然所江戸表當金前入用金の儀精々致差畧候而無様

払方四千三百両有之一向心当相見得不申候ニ付
於江戸表も邑々沙汰申付候処三千両向者於同所
如何様に茂才寛調達向を合せ候儀被而十三百両
之所者何分繰合之手段無之ニ付大坂并在所表而
所之内ニ而調達之上金前向合候様（中略）寛元
之儀茂果年差支之上去年中より別而繰合方差支之
趣大凡御向茂可被下種々之令繰を以て漸々而都
廻米茂積入方向を合せ候ニ付此節家中扶持方等
迄至極差支罷有候様ニ御座候得者於此表如何様
ニモ調達方雖相成左候而者江戸表繰合せ方向欠
ニ相成心至而差支之儀眼前ニ御座候實様方ニ茂
段々御心労被下御出銀茂御出積被下候上又御無
躰の御頼方ニ御座候得共右千三百両之儀者貴様
ならび山崎屋藤藏御西人ニ而何分ニ茂御調達被
下候様被上候尤右引込廻米之儀者当秋新穀を以
別段繰合置於寛元寺空御渡可申候向此上御心
労右御出銀の儀何分御頼申候向此度米方役人爲
差登候ニ付具々申合勘定奉行々茂委曲可及御頼
候向偏ニ頼上存候云々

ここには聊か誇張があるかも知れないが、一応

事實を訴えているものと見てよいであらう。この
手紙は寛政二年六月のものであるが、藩日記にも、
この山崎屋と茨木屋に對し金の融通を頼んでいる
記事が隨所にみられるのである。即ち、この両者
は長年藩の寛元として藩に金を融通しているもの
で、大坂への廻米以前、米穀收納以前に借金を余
儀なくされ、新穀はそのまゝ寛元の手に渡り、更
に町在の米を駆集めて廻米とし、それでも足りず
に常用商人にも頼めず「無是非銀主数人ニ求繰出」
才算段を講じ、それにも断られて又常の御用商人
に談じ込むといった有様で「家中の扶縁過半迄減
少」せしめるなどの策に出ざるを得なかった。

従つて熟作の年があつても「数多の銀主取囲不殘
差向候とも難及躰」であつた。そして手段に盡は
てて待を低くして累年の銀主の情に訴えて「借入
之内聊か申述候上当廻米相定候所——家中の扶助
は不及申公務常用共一切空当ニ而此節役人とも手
段尽果候策此上御心労之儀難申入候得共累代の御
親及を持って相統不足の分御繰合入候乍去過分之
申入万一御承引無之候若何を以可致相統哉」と

偏に懇願し、今度貸してくるなり、卯年以來の
芳田畑をも陶登して安堵出来る状態にしていきた
い旨を述べ、その爲にも是非御添債をと云ってい
る。

このように藩の財政は全く御用商人に握られ、
金融にも廻米の売却をにも彼等は主筆権を握って
た。寛政三廿二月、大坂表に在って金の調達に
苦心していた石郷國權左エ門は、次のような書状
を国元に送っている。

「江戸表去暮申新取延置候金高式千貳百八拾四
兩当三月節委曲調達懸合差下候様被仰付候ニ付
賣而千兩茂調達差下申度色々懸合相願申候得共
不承知御座候右の款若別紙ニ而申上候通御座候
向逆送御廻船四五艘着岸無御座内は先達而茂申
上候通御余石差下候送無竟束奉存候殊更疎虞無
御座候ニ付第一濱方懸合茂難相成見合罷有候是
迎茂不容易なる義何れ山崎屋引請米の内当分借
名仕直ニ借返し山崎屋手先之補に任候義御座候
の同承知の程茂無當束心痛仕罷有候何れ同人婦
坂不仕候得共此上強而利害を申候候而茂鴻池三

家眼前破に罷成申候向江戸御下之金如何参可
哉爰元三月節季拂四五拾兩之御金之茂爾今出
銀治定氣御座候江戸表御差支諸事御不都之慮幸
恐入候云々。」

以て當時の窮状を察するに余りあると云えよう。
そこで當時における藩の収入状況を見ると、寛
政三年二月二十六日の算によれば、次のごとくで
ある。

一、金九千八百六十兩 「御取租ニ而去八月よ
り出銀是迄の御金高

御座

一、金八百七拾貳兩式歩 右出銀高の元金の判定

一、金四百兩 御用紙御蔵諸

〇、壹万四千六百三拾貳兩式歩

一、金三百兩

近衛若君様御元服ニ付御先格
の通御守持金被遺候様京都御
用人々申

一、金千五百兩

別紙
金別紙

一、金貳千貳百八拾四兩 江戸表去暮二月迄申
延新候金高
一、金貳千五百兩 正月より御常用金の内五百兩

残金下

一、金六百兩位

大坂三月より七月迄御常
時金大郡(註)一月分

ノ七百八拾四兩

丸墨共惣ノ式万四千八百拾六兩二歩。

内 桌羽 三千五百三拾壹兩貳歩 残金

壹万八千百六拾四兩

御国ニ而兩家の内懸合
の金高未薩蔵歸坂不仕
候得共内々義定
の額三兩差引。

残り三千六百五拾貳兩貳歩。

しかして、是迄の出銀金高壹万四千六百参拾貳兩
二歩を圓元で借用交渉で内定せるものより引いた
三千兩余の金は、廻船の見分が済みぬので直ぐに
は調達出来ない旨述べ、惣金高二万四千八百拾六兩
二歩に相当する石高は四万八千八百七拾石である
が、当年の大坂への廻米はそれより不足するよう
では甚だ以て宜しくないので、次に入用分を申し
上げるとして、次のごとくいう。

京都、大坂の諸役人御議元知行儀子御扶持米や、
金高貳万八千兩余の御常用金、大郡等の石五万五
千六百石が必要であり、「是非御仕向無御座候得者
三々年御無躰ニ御頼被成江戸御居急御凌相立候御
儀理相不申候處」であるにかゝらず、廻米は四

万壹千九百九拾石しか届かず、しかもその中、万
六百九拾石は蔵元の手に渡っている。そして壹万
三千六百拾石の不足を生じている、と

藩の実收はどれだけあったかは明確ではないが、
参考として文政十二年度の数字より考えてみる事
にする。

これによれば藩の収入の表向き高は拾三万五千
石、この内同元^①に於ける諸経費として七万九千
三百二拾石余かかり、国外に於ける諸経費として
五万五千六百八拾石となつておるが、実際には江
戸御廻米ノ五万七千六百四拾石、大坂への御廻米
は壹万九百五拾壹石で計六万八千五百九拾壹石と
なり壹万貳千九百拾壹石の超過となっている。

このような事から大体十一万石ないし十二万石
程度と思われる。當時は荒廃後の回復をはかる為
にも圓元費用は多^②出していた折でもあり、中央に
あつては奢侈の風強く必要以上の費用を要してい
たのであるから、その負担は結構農民の上に及ぼ
されていたのであるが、その年貢を課すべき耕地
も年貢負担者たる農民も少なく、それ等の農民も

重税の爲に離農し他散する傾向にある爲に、藩としては年々の収支が全く均衡を欠かざるを得ない状態に置かれていたのであつた。更に藩費を消耗せしめたのは松前出兵の争があり、これは多額の出費と農民の困苦を増し、藩にとって大きな負担となつた事勿論である。

註

① 津軽家文書―青森県史第二卷一、一三三―

六頁、に拠る

一、在方の状態

(一) 経済的側面

寛政の頃には益々貨幣商品経済の波は農村に浸透して、封鎖的な自然経済の崩壊を早めつつあつた。商品が農村に入るといふ事は農民の貨幣に対する魅力を増し、その貨幣獲得の爲に自から生産したものを商品化しようとし、商人になろうとするものを多くした。特にそれは家屋、土地を所有せず、單に勞働力としてしか存在しない農家の二、三男に多い傾向であつた。彼等が耕作地を離れる

争自体は年貢を納める賣仕者でない限り、そして藩之の年貢米の減じない限り問題ではなかつた。むしろ農村人口の過剰に悩んでいた藩などでは、彼等を奉公に出したりする事を奨励していささずるのである。しかし、それが人不足をもたらし、耕作に差支える場合、嚴禁したのは勿論の事であつた。又一方困窮せる百姓が高利貸資本の爲に益々困窮し、一方に富農を太らせていったのであつた。これらに對して幕府諸藩がいろいろ対策を考え、法令を屢々發しているのであるが、それは皆一樣に農民の奢侈によつて生じ來たものとして頻りに儉約を奨励して、その生活の細部迄干渉し、以前のまゝの状態を維持させようとしたので、貨幣で買つたものは便利であろうと経済的だろうと奢侈とぎめつけるのである。しかし幕府や藩が如何に禁止しようとしても、幕藩自体が貨幣経済に頼らざるを得ない許では片手落とならざるをえず、社会の趨勢に抗しえず形式的なものとならざるをえなかつた。

寛政元年十月十七日に出した令に左のごとくも

のがある。

近年在方之青番に長し、分限不相成之体相同得候、別而婦人の衣類、御家歴々之族も同様相即得候、且又在方商家多有之候而看、第一農事故障に相成、風俗も不宣候ニ付、前以被仰付も有之趣、當時木綿着商売之者、所々寄、古来三増倍多相成、無用之注文下し物等も有之由、右之通之風俗故、在方二男三男は百姓に相成候儀と存、多分は商人に相成候故、自由民多、惣之者不足相成、天に隨ひ候子孫之者迄も我勝ニ高給錢相望候故、大抵之百姓も召込候儀成兼、持餘之田畑も存分令入毛行居兼、荒地ニ相成候趣無相違相聞得候、一程之儀各若々吟味も無之、唯卯年以來人不足故、雇田相成立不申上斗申出候而看、相違の申出ニ候、其上近所御勘見方メ合之儀、精々被仰付も有之趣ニ而、不得止事、種々慈謀而已有之、御取扱相成候、往々様之形ニ而ハ、折角被仰出候例政道も相立不申、必竟在方衰微之基と相成候、唯之御方愛憐之情昵歟候而者、往々吾人多出可申、度人を敵刑に行

候而也、万人之爲に相成候儀本意と存、右之趣各々得被致勘辨、組々代官以來之儀嚴重に取扱候様、郡奉行不致呼上於御用所相渡之。

當時は天明の大飢饉により人口が甚だ減少して耕作者が少なく、他散者を呼返し、又他領者の移住を大いに奨励していた時期であり、荒廃田圃墾の爲にそれら郷住農耕者に一応寛大な態度で臨まざるをえなくせられていた。否、寛大というよりは統制の虞が緩められていたと云つた方が適當といふ。郷住者と共に、當然の事ながら多くの商人が流れこみ、これ等に影響されてか之つて在方小商賣も増え、郷家の子孫を商途に走らせる事となり、人寄策を行つて領内の人口が増える割には農耕人口は増え難かつたわけである。寛政元年三月に、商人が高利をむさぼつて諸人が迷惑しているの直段帳や番売品目についての書付を渡して嚴重に守るようにと責めているが、ほとんど守られなかつたとみてもよいであらう。郡方に於ける懸案は人不足や役人の怠慢から徹底を欠いていて事勿論であり、又兎に何恩頼よりの人寄に躍起

となつてゐる時期に、あまり嚴格な取締りをする事も出来ない状態に置かれていた事も考えられる。同様に銀を出して、他産品は一刻を、御國産の品は武割直下にするようにし、「日用之品」大低相調、木綿屋荒物屋并古手商店之者共迄、人別毎ニ諸色直段帳相渡置候間、右直段之通吟味之上相調候様。」と三奉行に仰付けたのに対して、四月十九日に三奉行は、國産品の方は次第に直段を下るであろうが、他産品の方は太徳類等特に上方の元値が高い為には勝手にならない、此度青森漢之頭船がのいたが高直である為に仰付けに従えば商取引は出来ず、どうかと云つて取引しなければ一統差支になり商筋も直響がつかう事になる旨、申し出てゐる。これを見ても在方に対する商品の流入は防ぎえない筈であり、價格統制も思ひに任せるかのわけである。

農民達は、或は收穫物の殆どを貢租として取られるのらい農耕を離れ、或は農耕に従事しつつの隠商売を行う者が多かった。大凶作後で土地は疲弊し勞力負担が大きいだけ、より安易に貨幣の得り

れる商に転じようとする者が必然的に多くなり、他領からの移住者も前をする者が多かったようである。

(二) 農耕人口の減少と奉公人

連年続いた未曾有と云われる天明の大凶作と、それのもたらす飢饉の為に生活の手段を失い領外に離散する者が多く、又飢饉、悪疫の為に死滅した者だけでも、約二十二万余と推定される人口中八万余と云われるが、³⁾ 平常に於ても餓死しない程度の低い生活状態に置かれていた農民が、その大部分を占めていた事勿論である。農民の他出は元より嚴禁されていた所であるが、着としても救済の術がない、名目をつけて他散する者を黙認せざるをえなかった。天明三年七月頃の状況は、「日頃金米、木炭、御新田、左田赤田組之者共、何れも家を明ヶ、伊勢参宮之体、或者色々ノ形ニ出立、秋田口へ立越へ候者甚万人に近しと云、此後弥増に新田并御近在迄も離散に越き、淀ヶ岡口晝夜引も切りすと云、代官より委細申出候處、郡奉行并御用所にてても承居候、此義ハ兼而承居候得共、先

「不備差還候様被仰付候」というのであったが、その後流出を差止め弘前に小屋を建てて引戻して收容し食料給与などを行った。その為「先達而より弘前和徳町へ施行小屋五間に四拾間に取立、足利二人に八四五人取扱にて書領三勾指被下候、然ルニ一日迄此小屋へ入候もの二千七百三拾五人、右の分志人ニ付玄米壹升銭一文目ツツ被下、各居村へ飯り候様被仰付候。」とあるが、これらは一

部分にすぎず、全体から見た場合はほとんど効果をあげてなかつたと思われる。又御手当を貰った者として居村に立帰つて農耕に従事出来るだけの手当も貰えず、結局は流浪し或は他散した者が多かつたと思われる。農村よりの離散者は何も凶作時に限つた事ではなく、當時みられるようになっていた。しかし農民が住み慣れた土地を捨てて離散するといふ事は容易尋常な事でなく、特別止むをえない事情のない限り、土地を捨てるという事はなかつたのであつて、唯借金返済に窮するとか、不義理を食ふた者が出奔する場合が多く、又一方二三男婦女の出稼奉公による離散が多かつたよう

である。しかし天明の飢饉後は極端な人口減少が起つた為に、奉公人として出向く事を差止めたのは当然の事であつた。当時天明より寛政にかけて全国的に奉公に出る者多く、しかも江戸に出て奉公先もなく浮浪の徒となつてゐる者が多かつた為に、幕府では奉公人に附しての餽を出してゐるが、それに基づいて津輕藩でも大目付餽として次のように令してゐる。

「今度御公儀御餽の趣、村々人少にて荒れ等所之場所より他領之奉公掾等に不出様、能仰出候、又御領分凶作以來、別而人不足に付、荒地等打おこし果敢取不申趣有之候間、他領之奉公人等出候儀、きびしく御差留被仰付候、若無據他領之不罷出候間不相叶用事も有之候ハハ、其訳具に向々支配頭之申出候之様、御吟味之上可被仰付候条、右之趣末々の者共迄心得違無之様、家中寺社町、在出仕候者之は銘々主人より申付、其外在町浦々端々借屋之者に至る迄、村役町役より不漏様危度申付候之様、被仰付候間、此旨惣餽可被申候候」

それでも尚、口実をもうけて出て行く者は多かった。奉公人は唯に他領へ出る者だけが問題なわけではなく、當時は武士、町家、農家共に人不足に悩んでいた折から、特に武家、町家の商人は奉公人の需要度が高かった為、在方より町方へ流れ込む者が非常に多く、又彼等の給銭は日増に高くなる傾向にあった。為に農民が仮子を雇う場合にも給銭を多く望む者が多く、それを無理しても雇う農民は非常に難儀をしたわけであった。従つて藩としても捨て置けず、寛政二年に次のように定めた。即ち、仮子への給銭は百貳拾目に定め、それより増銭して雇う者は百姓からは二百目、仮子からは百目を過料として取立て出精の者への褒美として取りせる事。そして大庄屋の許可せる印鑑のない者は何処へ行つても使わない事、更に印鑑を所持せざる者を雇っている事が発覚せる場合には、置主より二百目の過料を取り、仮子は前の働き場所引戻して無給銭で働らかせる事、住居させていた者の五軒組合より百目、不吟味の村役より百目を徴す事になっている。しかしこれが役立て

なかつた事は寛政八年の寛を見れば明らかに知るところである。即ち

「近年在方人不足ニ付、仮子共過分之高給銭相望、其上難儀等給候得者忽々主人之故障を申唱、不時之出替出奔いたし他組へ逃去り、過分之高給銭を取致奉公候故、兎角農事此当之人配、差当在方及難儀候ニ付、右為制道組乃を仮子頭差立置候処、必竟数ヶ村引増取扱候故、右不吟味方不行届、兎角被差立候趣と相友し、かえつて御締合不_レ付ニ付、是迄之仮子頭取扱申付候、依之以来為御締村乃庄屋共ニ而一村限仮子出替り取扱申付候、尤仮子出代之節、手代庄屋印鑑之手札持置、仮子之もの之相渡置、仮子の者其主人之右手札差出置、出替の節其主人より庄屋之相返候様、他村之奉公罷出候節者、其差置候村所庄屋ヶ、是迄奉公致罷有候村所庄屋え召合、双方出入差障無之処ニ而是迄の手札向方庄屋之差遣、右手札の通新規手札持仮子之相渡、当主人之差出置候様、右写取候古札の分者、手札名前の庄屋之相返候様。」

と仮子の取扱い方を嚴重にしているものの、人手が足りない以上隠れて不法の給錢をもらって雇う者があつた。その徹底を期する事は出来なかつた。武士土替とも関係するのであろうが、この時期は在方より町方への奉公人が多い事と共に、町方より在方へ奉公に出る者も多かつたようである。在方へ奉公に出た者は、其村より前町年寄へ申出させるようにしている。しかし兎に前町方へ出て働かしている者を除いては、一應高給錢を貰つてゐる農業奉公人は、何処かの地で耕作に従事してゐるわけであるから、彼等は直轄農村の衰微の原因とはいえないので、絶対的な人口不足がもたらしたものである。情農の風、行なわれて云々、とは慶多受られる所であるが、その地に在つて生計の元たる收穫物獲得に出精せざる者はすくないと云つていいので、為政者はその結果の収をみて、人口不足からである面に留意する事少ないのである。

さて領内の人不足を補う爲に藩は極力離散者の歸住并に他領者の移入を企つたが、それら歸住者は農耕に従事はしても、隠田となして貢租を納め

ぬ者が多かつたと思われるのは当然の事で、荒後の田畑を開いても直ぐ相応の收穫物をあげためのは勿論の事として、土台始めから、前の如き貢租を負擔せしめるならば歸住者の増大は期待出来ない所である。帰参者も又他領からの移入者も、農業に従事する者もかなりあつたにしろ、町方に入り込んで商人になる者や奉公人となる者も多かつた。當時はむしろそれを望む者が多かつた筈で、爲に在方よりわざ／＼出奔し、改めて移住者として町方へ入り込む者もあつたのである。しかし追歸参者、移入者による荒廃地開墾も多く行なわれるようになり、寛政中期頃迄にはかなりの成果をあげてゐるのである。

(三) 不正行為について

この時期は、一般に行政風俗乱れていた時期でもあるので、代官庄屋による不正行為も多く、これの処罰例も色々とみられる所である。それは多く夫喰米錢の私曲や、検見に當つての不実の申し立てしたとかであるが、今二三例をあけると、大光寺組の代官手代の工藤参十郎という者は夫喰米

錢を私して、返済の時返せず、庄屋共へ云いつけたり、重立より取りたてて上納したの是不埒であるとして、手代取放組に処されている。また、浪岡組の中野村の庄屋喜八郎は村方へ渡すべき諸色代錢等を私し、夫喰米の渡方も過不足にし、又貸見で割引いた内の三分の一程を私したの是不届至極で嚴刑にすべき所であるが、其の持家田畑屋敷を振向けても金才竟し村方へ歸すように指示し、鞭刑三十に処し十里四方に追放している。農民に難儀を及ぼして施設上差障りを生ずる者に対しては、かなり嚴重に取締つた事が知られるが、この他多いのは博奕に対する取締と見継山からの盗材、米の隠津出などであり、これらは何れもその五軒組合並びに庄屋がそれぞれ鞭刑、追放、戸メなどの刑に処せられ、特に博奕の処罰例は多く、当時の農村風俗がかなり乱れていた事を知らう。即ち、十間村の喜兵衛なる者が博奕をしたという事で鞭刑三鞭に処し、村俳組は自由とし、五軒組合の者は監視もせず不届という事で戸メに処し、村役も戸メにされている。この外盗材を取つてい

科

る場合もある。隠津出に対するものとしては、三川組沖館の太郎助は米七俵を津出したので鞭刑十二にされ、組合は一軒につき三百五拾目の盗料、庄屋は戸メとなっている。この処罰例は寛政二年六月のものであるが、隠津出は松前方面へものが多く、米留役などを配置してこれの防止に努めてはいるが、年と共に多くなっているようである。

次に駄下米を私曲した百姓に対する処罰例としては、五人の百姓が弘前御蔵より駄下米三十二俵受取つていながら濱下げせず喰潰し、その後新穀を売払つてわざわざ古米を賣整い、後に濱下げした事は不一、極という事で鞭刑九に処して村俳組は許したことがある。

以上断片的に処罰例を挙げて来たが、これらの不正行為が多くみえているという事は、取締が嚴重だった為というよりは、当時の風俗がそれだけ乱れていた事を証明するものといえよう。

註

① 要記校録(歴史引用、第二卷四八五頁)

- 二、廢田開墾と武士土着

あろう。表層に現われた高約三拾万石の收穫をあげうる耕地面積はどれくらいになるかといふと、平均して白田の收穫高一反歩につき一石としてゐると約三万町歩となるので、これから又、も前掲荒田の一萬四千町歩に、更に荒畑六千九百餘町の被害というのは、如何に甚大なものであつたか知りうるのである。

24

家中在宅いたし、毫田等取立之存念之族百之段被_レ及御前、尤之儀ニ被_レ思召して、望の者は勝手在宅耕作に従事する事を許しては居るが、いかに窮してるとはいえ、藩士の土着には可成躊躇する事あったので、「御先祖代々御旋ニ被_レ爲_レ皆候重き筋には候得共、被_レ任_レ其意御給禄之高に庇し、地面割渡在宅被_レ仰付候」と述べている。土着したという者があるのに対し、それを中止させても他に彼等を救済する手段もなく、成行に任せてこれを認めざるをえなかったのである。従つてこれら土着する者に対しては、財政状態から出来かねた面もあるが、積極的に補助する事けしていず、引越入用費の前借をも認めず、又「罷下り候上ニ而、假令何様の差支の儀有之共、不_レ被_レ天御沙汰候」と云つていたのである、これは単に土着する事は藩が望まぬ事であるという事を示している外支辞令的な意味を含ませたものであらう。この時には試みとして一時的に家中の士の困窮を救う為にとつた策で、回復後は停止すべき腹であつたと思われる。この藩士土着という事は、当時困窮せる武士、特

に小禄の者であればあるだけ扶持米少なく生活に窮し、止むなく近在或は以前彼等が土着して居た地に下つて耕作に従事する者が、藩の許可以前にかなり見られていたと思われるのであつて、彼等の希望によつて正式に認められたものである。この藩士土着はこれ以後次第に奨励されるに至り遂に半は強制的に実施される事となるのであるが、これが津輕藩に於て一応かなりの実施がなされ、少しく効果をあげたのは、かつて津輕藩が一度も転封をなされなかったという事が非常に大きな意義を持つていゝといえる。徳政公の時代に藩士は一応全部城外へ移つたといふものの、彼等が以前に住居していた土地との關係が完全になくなつたとはいえず、比較的密接だつたと思われる。この為武士の再土着という事も、それほど大きな抵抗もなく行なわれたのではないかと思われるのである。

かくの如く藩士の土着を認める一方、ようやく農民に対しても陶墾を本格的に行なわしめる事となり、秋田領その他より買米して夫喰米を給し、

富豪家に才覚して、釀金させて因窮せる百姓共を援助させ、且耕作に対して念を入り出精相勤めるように勧め、天明五年には新たに耕作仕込世話方として在方より七十六人、市井より五十人余を任じ、

御用ばかりは家老の津軽多膳、御用人に喜多村監物、勘定奉行笹角之丞、勘奉行村上理右衛門、佐義理兵衛の下に、鋭意荒田開墾に乗り出す事になった。もつともこれには大庄屋の良さを得る必要があつたので、十四人の大庄屋を任命し、是迄の

代官の様に御用を取扱わせた開墾に出精せしめた。この結果藩内の開墾はかなり促進されたらしく、

七年の終り頃には「是歳七分ノ作躰、荒田ノ開墾高御郡中二千町歩、残り八十町余有之趣」と記しているものがあるが、勿論これは全地域にわたつてのものではなく、一地域にのみ述べたものであると思うが、兎に角相当開墾されていた事は知るのである。それはマ翌八年に岡本宇内を御筆奉行に仕じて國中惣検地を行つてゐる事からも、一応の成果を顕べる迄になつてゐた事、開墾が一段落してゐた事が推察される。しかしこの検地の

結果の記録はないので、その実数は知りえないが、未だ未開墾田を多分に残してゐた事は寛政期の帳より明らかな事である。

これ迄領内に保有する農耕人口と、他領より呼寄せた人々、帰参者等を督励して開墾に当らせられた、わが藩に未だ開墾が止まる荒廃地は多かつた、爲に差當つてこれに投入出来る労働力は家中の士であつたのである。藩ではこれ迄の土着士の開墾の成果も考へて、藩士による開墾を一層奨励する事となつて、寛政元年十月次のような旨を触出した。

「去ル卯年以來一統難義ノ内、近年諸色高直ニ付小給ニテ家内多ク族、月々渡方引足兼難儀ニ候向、男女相成ノ手作並農事ナトヲ以不相凌候テハ諸ノ増増候向、コレマテ我末候族モ多クハ相止候ニ付、古来ノ通り在住居ニテ荒地開墾寸作イタシ農族有之候ハハ、少身ノ内役柄ニヨリ引越仰付ラレ候向、手人数ヲ以テ荒地開墾イタシ候様、右ノ族へ御手當下置レ引仰付ラレ候、猶マ勤番非番等ノ儀ハ追々御沙汰被仰付候向、

望ノ面々郡奉行勘定奉行へ承合候上ニテ申出候
様仰付ラレ候し

ここに到つて藩士を土着せざる等によつて、彼
等を救済し、それと共に生地を増大を企つて在方
を振興しようという意図がかなり強く窺はれてく
る。

寛政二年には厳しい態度で生荒田畑の調査方を
命じているが、これは調査を命じてもそれに応じ
なかったり、或は隠田となして正しい報告がえら
れなかったからで、これは荒後幾ばくもなく、又
それを扱う役人達が忠実に職務を履行しなかった
為でもあった。しかし実際に田畑の状態が判明せ
ぬ限り、政策施行上困難を伴う故、更に料地面積
を明らかにし貢租の増入を企つた。寛政二年四月
には、田畑生荒調は、天明八年迄の分は用捨する
事として其の節迄の調書は返し、去年改ためも生
地荒地を明細に調べて提出させるようにしたが、
期日迄出さなかつたり、申出高に相違方たりし
た為に「凶年後最早年数も有之也、御地面方混雑
致置候而ハ、各御役儀にも相拘不軽事ニ候向、此

上生地荒地明細に相札候而、隠田等無之様取扱之
仕向可被申出之旨⁸⁾」を郡奉行、勘定奉行へ口達書
として渡して役人を督励し、在方の振いに怠慢な
ないようにして田墾を促進せしめた。かくの如く、
積極的な田墾政策によつてかなりの成果をおけた
ものらしく、津輕興業史によれば「コノ年段々寛
田モ打起リ（中略）苛政ノ事一切ナケレハ隣藩ヨ
リ一族ヲ引連龍ヲ御領内ニ移スモノ多カリキ云々
これによれば、善政の爲に民安んじ農村大いに振
興したかにみられるが、事實はそうでなかつたと
いつてよいであろう。藩の監察の目がよく届いた
所はかなり成果をおけたであらうが、それは藩に
とつての成果であつて、藩の目をくわまして住む
者六七百軒もあつたというのは、藩の政策が彼等
にとつて苦痛だったからに外ならない。しかしこ
の時期は極く農民を保護しようとした時であるの
で、以前よりけ農民にとつては苦痛は軽減されて
いたであらう。しかし農民が帰村し荒田開墾に従
事する者多かつたというのは、他領へ行つたとて
格別樂を出来るわけでなく、むしろ見知らぬ土地

で新田に耕作をするという事は、余計に困難を伴うものであり、それよりも長年住みなれた土地で幾らかしも保護を受けて耕作した方がよいという事で帰村する者が多かったのである。

しかし又、当時の藩主信明公の善政の爲もあって、領外より移り住む者多かつたというのも事実のようである。公は寛政三年になるや、新田に政策の建直し強化を図る爲に諸役を更新

して、御用人に牧野左次郎を登用し、その配下に勘定奉行兼郡奉行の赤石安石・エ内、菊地寛司等を配して鋭意藩政を刷新し、陶塲の一層の進展を企図した。これに対し赤石、菊地の兩人は次のような献策をなした。今それを使宜上個条書にして列挙すると、

- 一、旧田位は変化するもの故、旧田位のすま課税するのはよくない事。(田位の校正)
- 一、上方の金主よりの借金をなるべく止めるように出納の法を立て、借財は十ヶ年ノ休年とする事。

一、その爲に二百石以下の衆士、御近習並勤仕

の繋ぐないものは残らず土着せしめ、荒田畑を閑かしめる事。御目見以下は御仲間廻の類を除いて悉く土着させ、御給分を半減し、荒田閑荒は勿論、土着衆士の家来又は農家の子業をさせる事。

一、戸籍を正して農工商に移つた者、小商人、逆食の者を農に歸さしめ、四民の業を明確に分ける事。

- 一、五軒組合の取締を嚴重にする事。
- 一、荒後諸山よりの諸木多伐を防ぎ監視を厳しくする事。

等々である。これらの建策に対して藩主信明は大體承認を与えてゐるが、唯藩士土着に關しては「荒タル田圃を閑ントノコトハ、能々勵ミタニハ陶ケマコトモ有ルマシ、衆士ヲシテ居ヲ村里ニ移スハ、年々凶荒ニ疾レタル民トモノ勞役ノ事多クシテ苦シミニモ堪マシキナリ、古ハ皆土着ニテ有シヨ、信政公奴前ハ移ラセ玉ヒケレバソノ尊慮ニ背キ奉ラン事恐ルベキ事ニアラマヤ、(中略)初ハ士農ノ分モ有ルハケレド、年歸ルニ隨ヒ士風自ラ

矢テ農夫ノコトヲ談ラン、云々¹³と述べたとい
うのであるが、既に藩士の土着を奨励する令を発
していたが、こゝでこのように云つてゐるのは不
可解とも考えられるが、やはり藩としては藩士土
着を表面立つた政策として打出す事は、尚躊躇せ
ざるをえなかつたものであらう。従つて、藩士を
土着させる事を余儀なくさせる程、その必要にせ
まられていながら、未だ希望者の又を土着せしめ
る状態が当分続く事となつた。ただこゝで面白い
のは、一方で武士の土着をすべしといひ乍ら、他
方身分制を保持しようとして極力努めてゐる事で、政
策そのものに大きな矛盾を含んでゐる事である。

この藩士土着と廃田期望という事は、勿論廃田
を勵くという事が主目的ではなく、藩が扶持方に
窮し、一方では藩費軽減の爲と武士の救済の爲で
あり、他方、在方の統制を企てたものと思われる
が、後述するやうに、結局は荒田畑田墾に聊々成
果をみる事は出来ても、在方に進儀を贈す事多く
なり、藩の所期の藩士の救済には役立つても、全
般的にはかえつて逆効果を招く事となる。しかし

それを敢て進めざるをえなかつた所に、当時の
藩が如何に行きづまりを感じていたかが知られよ
う。

(一) 寧親公時代

新たな政策の下に藩の振興を企てた信明公卒す
るや、次いで襲封せる九代藩主寧親公は前公の政
策を受けつぎ、これを押進め發展をかけた。公
は藩士土着策を重視し、これを積極的に行わしめ
る事とし、寛政四年八月に次のような令を出した。

「去ル卯年凶歲以來廢田多有之候ニ付、天明四
辰年十二月御家中々面々勝手次第在宅之上致聞
發候様被仰出、又々寛政二年十月右之趣被仰付、
追々罷越候得共、御手当等も引定り不申、且田
屋所并寺寄之村所も無之族ハ、無據願等も申出
兼候趣ニ相聞得候向、今度御手当割増等も御仰
付候、依之勝手ニ相成候面々ハ願申出候様云々
それは知行取は知行の一番多い村へ引越すよう、
又方々に知行地を持つ者は在宅せる地域に代々の
地を与える事、知行地が荒廢に帰して引越す
にも寄所のない者へは別地を与える事、御切米取

の者の開墾は切米の高に依じて後開墾地を知行地とする等とし、それ迄は切米を四分の三だけ渡す、第三に、なるべく藩士が自発的に在方に赴くように奨励した。しかして、更に九月には、

「此節荒地多何れの給地にてモ凡仕付之分者無之、殊諸品成等有之」付當年ハ地元引渡之儀相成不申候＝付、當年の處ハ引越被仰付候族ハ、其村所ニ罷有候百姓之分并手寄の百姓斗地預直收納被仰付、素春ニ至リ夫々地元檢議の上相調、荒地諸品成等有之分并至而遠在之分御藏主地より地元繰替、四ツ物成高水帳渡方被仰付、尤當年御藏渡之分者、平均檢見并諸上納御差引之上渡方被仰付候。」

と令している。これを改めて藩士の土着する者はあまり多くなかつた事、又あつても開墾資金の不足や不慣れの爲に効果のあまり表われてなかつた事が知られる。しかし右に引用した文中より推察されるように、荒地地が多い爲に藩士土着は、どうあつても促進させたい所であつたから、十月に再び令して土着する者は二ヶ年間は無年貢とする、

若し今当米を一反歩につき六斗宛出すときは一ヶ年の無年貢とするとし、年貢米も御目見以下の知行取には六ツ成を五ツ成とし、御目見以上は四ツ成を三ツ成半にするなどの策をとつてゐる。このような策をとつたにかゝわらず、応ずる者はなかつたとみえ、十二月に又同様の触を出している。それは又この年の凶作（公儀への報告によれば、新古田共五分三厘の損毛）によつて余計にうながされたものであらう。五年二月に「九浦奉行并其外日勤同様繁勤之族も、在宅致度心懸之面々在宅之儀申出候様、御役柄ニ寄其節御沙汰之上被仰付候間此旨可被申候」と云つてゐるのをみれば、繁勤以外の族は殆ど土着し、更に増加を企てべく繁勤士迄をも土着させようとしたという風にも取れるが、一志土着希望者が限界に來た爲に、更に繁勤の族でもかまわぬ事としたものらしい。勢の赴く所、遂に寛政五年九月十八日、表面きつて土着を断行する事となり、次の如き触を出した。

「御家中在宅之儀先年より連々被仰出モ有之、尚又去年格段御沙汰被差加被仰出候處、其砌

在宅之面々茂有之候、然候處其後色々難説等有之候故、在宅心懸候面々茂何となく差控見合＝相成候趣相成候、畢竟在宅之儀者、御家中成立之儀で「思召被仰出候事」＝候處、前文之通彼是見合＝相成罷有候之儀、折角之御沙汰相成候事＝候向、今度亦々在宅之面々江御手当増被下置候条、可成丈者致在宅銘々成立御奉公相勤候様被仰出候、若又故障有之早速在宅相成兼候面々者、其旨可申出候、其子細＝寄御沙汰可有之候。

即ち、在宅をしづめている者を半ば強制的に在宅を促し、武士土着を一時的なものではなく永續的に行おうとした事は、「是迄年限在宅之面々江御手当割合半分通被下置其俟永久在宅＝被仰付候。」と云っているのからも知られる。このような処置に対して、土着すべき連中はかなり騒々しい反響をみせたが、漸次上級の士より在宅が押進められた。しかし彼等の多くは在宅を望まぬ者多かつた爲、争つて成べく弘前近在に土着しようとし、又既に農民が開墾し成立している土地に割込

み、土着に先立つての在地見立に際して同一地は何人も莫中するといった有様で、最初から農民に難儀をかける事多かつた。爲に藩では土着を禁ずる土地を指定した。

通、

。知徳村、富田村、唐内坂村

右三ヶ村御差留被仰付候。

。駒越村、石渡村、

右二ヶ村、町続之場所住居屢敷申立候分御

差留被仰付候。

。向外瀬村

此村本村へ住居之分ハ格別在領＝而も春日町へ続候場所御差止被仰付候。

右村々＝不限、在領＝而も弘前町続之場へ居宅取立候儀、故障之箇所之候向御差留被仰付候。

藩としては成にけな範圍の在地へ土着せしめ荒廢田開墾を策したらしいが、交代で弘前に出勤する都合上からも、盡在に土着する事は好まぬ所であつた。

かくして土着を増した藩士による開発は、どれだけ促進されたのであろうか、藩士土着の數に於いては正確なる事は不明であるが「寛政五年在宅之諸士七百九十四戸之候、^⑧」という記事があり、藩士の總數は宝暦の調査では「士家千二百七十余戸、^⑨」となっており、これが正しいものとすれば大半の藩士が土着した事になり、これ以後に於ても漸次土着が行われていると見てよい。これら土着家士による開発が行われたといつても、實際に耕作に従事するのは主に百姓であり、土着士家内手作りといつても不慣れた手法や、又土着士自体の怠慢によつて實際効果をあげた者は少ないようである。又効果をあげて可成りの開発を生じたものがあつても、それには作人への大きな負担をかけた、不埒の所業の上といつた場合も多く、開発に當つた士は追放され、開発地が作人に与えられたりしている。土着士の百姓農民に対する難儀の多くなつたのは、寛政五年以後、藩士土着を強く押進めて以後の事のように、百姓より定められた課税額以上に取立てたり、過役を申付けたりで

農民の難儀は一方でなかつた。土着士の開発に當つては、前述のように手当米を支給して奨励したわけだが、不埒なものも自分開発分より過分の支給を申請して種粃や御手当米を要け取つていながら、これを作人に渡さぬ者などが多かつた。寛政九年一月には「必竟者御家中並歸國人居移開発之分は種粃并御手当被下置自百姓開發之分は御手当不被下置候^⑩付、不実の開発方は有之候旨相聞得」たので御家中ならびに居移之者自百姓高無小者共へ、全て一歩に付六斗づつの手当米を給する事とした。思ふに土着士が自百姓に自力耕作出来ぬ者を作人となし、荒田開発と称して藩より手当を受けて私する者が多かつた爲に、自百姓を保護すべく土着士や居移の者と同等に扱ふに至つたものであろう。その頃になると、寛政初期以来人奇策によつて隨時参集し來たり、その年によつては、二十人も率いて開発に従事する者など居たのが漸次減少を収めて、「歸國歸着居移之者と而改^⑪此上過分引越後相見得不申、^⑫」といわれる状態に置かれるに至つてゐる。しかしこの頃迄には天明の

凶荒後の田畑も相当復興とれていた事と思われるが次に陶発に因する一例をあげる

当年（寛政六年）陶発相成候田方之寛⁽¹⁶⁾

一、三千三百九十人役 玄須新田

一、二千三百十八人役 金木同新田

一、二十人役 玄田組

一、三百人役 赤田組

△八千人役（一人役二百歩）

これは町段に直すと、三町六反二百歩となり、そう大して大きなものではない。勿論その年にもより組により一概にいえないが、全県から見た場合は僅かの部分より占めていない、九年の記事に「田方之饒者、卯年以來陶発方容易順之旨、尤可成とも陶発發候而後数拜荒地故新陶発同様ニ而、是年上納相成兼云々」というのから又ても、今年迄未陶発の田畑や手を加えながらも荒地同様になっているものが相当あった事を思わせる、しかし在方とは藩士の不正目上って多くなり、検地し水帳等を作っていて、勝手に地元を繰替て申出す「諸帳面相直不申候故、諸品兎定引合不申候、村方

も有之詮義申付候處、地頭を村役を故障云立、又ハ上納半形地頭江受取置不差出族も有之」という状態で、御用米を出す事が遅滞するので村役より催促しても彼是文句を並べ、或は無理に先納を申付けたり、重責を申付けたり、自分勝手に自分の田畑の人夫を徴発したり色々陶発に当って村方へ理不盡の所行が多く、又陶発手当を受取ながら荒地の修^{スル}放^{スル}ておくなどの行爲に及び、それが皆農民に負担となるわけであつた。

一方士風の頹廃も著るしく、上士に対する非礼を戒める触なども出ているなど、当然の事なり士農の区別も不明瞭となつていき、又土着士の弘前出仕も滞り、勤番交替の順月に至つても理由をつけて断る者が多かつた。藩に於ては諸務が人不足の為に円滑を欠くに至つていたので、行政も役人不足の爲思うに任せぬ状態であつた。かくて藩士の土着策も弊害多く、このまま続行する事が不得策と知つた藩は、寛政十年五月二十三日に建策責任者である牧野左次郎を退けている。

このように御家中成立の爲と陶発促進をねらい

として始められた藩士土着策も所期の成果をあげ
えず失敗に帰したが、引上げに際しても經費引足
兼たり、帰私を拒む者などあり、一応の引上げを
終えたのは享和元年八月頃のものである。

註

- (1) 佐藤家記 (県史引用第二卷四四〇頁)
- (2) 津軽藩史
- (3) 佐藤家記 (県史引用第二卷四三五頁)
- (4) 要記枕鑑 (〃〃〃 四四五頁)
- (5) 佐藤家記 (〃〃〃 四四七頁)
- (6) 西津軽郡史 (三三八頁)
- (7) 工藤家記 (県史引用第二卷四五五頁)
- (8) 要記枕鑑 (〃〃〃 四九〇頁)
- (9) 津軽興業史
- (10) 要記枕鑑 (県史引用第二卷五五五頁)
- (11) 〃〃〃 (〃〃〃 五六一頁)
- (12) 〃〃〃 (〃〃〃 五六二頁)
- (13) 齊藤長門旧記 (〃〃〃 五五九頁)
- (14) 平山日記 (〃〃〃 三二七頁)
- (15) 齊藤長門旧記 (〃〃〃 五三六頁)

(16) 津軽平野開拓史八六頁

三、農村行政

(一)、行政制度。

津軽藩に於ける行政組織中に次に在方に關する
ものについて概観する。

行政の最高責任者としては家老があり、これは
勿論藩主を補佐し、一藩大小の政務を掌どる。

御用人も又それに附隨して庶務を掌どり、これら

家老・用人が政務を議し政令を出すわけだが、こ

の下に郡奉行、町奉行、勘定奉行の所謂三奉行が

居り、彼等はそれぞれ郡政、市政、會計面を扱う

が刑法及びその他藩政府にて議すべき政令は、必

ずこの三奉行に下して沙汰する事になっている。

郡奉行は三名よりなり、民事農務は勿論物産税賦

役等を掌り、この出先機関が代官で、これは郡奉

行の支配下におかれて直接民衆に対して庶務をつ

とめるわけであるが、管轄地域の広狭に依り幾の

かの組をまとめた区割に二人づつ配され、一人は

その区の役所に出張して事務を扱い、一人は郡所に出て上司に申言する役目を勤める。何ヶ組にも販賣がある為に代官手代というものを各組ごとに置いた。これには在住の者の筆算に達する者を採んで使った。多くは郷士が任命されたようである。これは又組内の村数によって人員に差があった。村凡にはそれぞれ庄屋が一村或は二村三村に一人置かれ、又五人組をそれぞれ置いた。次に参考迄に少し例をあげると

藤崎組手代二人、親村十ヶ村、庄屋十一人

寄村五ヶ村、五人組二十人

田舎館組合全二人、寄村十二ヶ村、五人組十二人

寄村七ヶ村、五人組廿一人

柏木組手代二人全 十ヶ村、五人組十人、

全 七ヶ村、五人組廿一人

以上藤代三組ト採ス、御代官二人、小使三人。

藤崎組手代二人、新村十六ヶ村、

庄屋十六人。

寄郷十ヶ村、五人組三十八人

高杉組手代二人

寄郷十九ヶ村、五人組十九人、

寄郷十二ヶ村、五人組四十人、

赤石組手代 四人

寄郷三十ヶ村、五人組三十九人、

寄郷廿二ヶ村、五人組六十四人、

以上藤代三組ト採ス、御代官二人、小使四人、等々廿八組にわたつて、代官廿二人、代官手代六十五人、庄屋四百六十九人、五人組千六十五人となつてゐる。²⁾

庄屋数人の上に大庄屋というものがあるが、これはその時期によつて置かれたり置かれなかりした。荒廃田圃墾の時等の、彼等の力を借りなければならぬ時などに庄屋中の有力者を任ずる事が多かったようである。これらの他に、刑事面で農民に深い関係をもつものに御徒目付、山奉行等があった。

農村支配組織の末端を占め、大いに効果をあげていたのは五軒組合なるもので、連帯責任制の下に農民生活の細部にわたつて規制を加えていた事

云う迄もない。

(二) 勸農策

最も力を入れて扱ねばならぬのは凶荒後の周弊せる農村の整理であり、耕地の確保であつたから、これに藩が力を入れたのは当然であつた。唯藩自身で積極的に押進めるにしても資金難や役人の不慣れから、藩では左方の有力な者に農事を督励させ、又資金を出させ、兩墾に成果をあけた者は盛んに褒賞を与えて出精せしめた。兎に角「農事出精の者につき御賞被下置」という記述は藩日記の隨所にみられる事によつても、その奨励状態が推察されるが、勸農についての細かな規定はみられない。農事に當つての細部にわたる干涉は以前に屢々發せられているが、それとほぼ同様のものが寛政八年に出されている、それに依れば、農業は時節遅れにならぬようにして人力を盡す時は、不順時にても熟作となる事であるに、近年農業は年々時節遅れとなり悪作を取る事多い、これは我々（郡奉行）が耕作民のなすすまに任せておいて怠惰の誤を糾さざる爲である。明年よりは嚴

重に農事に差障りのないようにしたいと述べ

明年耕作迄末、田打より草刈迄、当年大粒何月

幾日より所付、田打ハ幾日にて終候儀、畔垣・

田植・草刈・可立・村納迄、日限考量之上、当

年中に拙者迄細組切・村切にも可申出³事。

としているが、其の耳にもより村所にもより相違がある故、耕作に長年従事し巧みな者の指導をえて、村役が穿鑿した上で申し出るようにというものであるが、これは勿論、常々農民に対して要求されたもので、従わぬ者が多くなるにつれ繰返されるべきは下のものであるが、思うに寛政初期以後の熱心な農業奨励策が、この頃になつて又淡薄し始めたものとみる事が出来よう。

寛政期に於ては農村行政は奢侈禁止と密接な関連を持つので、それに兩連すけつその施策についてみていく事としたい。この頃は全国的に風俗の紊亂した時期でもあり、特に他領者の移入を極力推進した時でもあつたので、それに伴つて商人や浪人多く流れこみ、自然在方の者は規定外の風俗に流れ易かつた為、藩では寛政二年二月に以て

よくなを發した。

一、在り男女共衣服之儀、一統布木綿斗相用候様、尤其品々善惡精確有之候得ハ、銘々分限惣赤相用候様、絹袖ハ勿論青梅嶋・糸入嶋等凡而結構成者、帶・袖口・半襟・頸巾・帽子たりとも堅相用不申候様、其外悉く是、こ入悉く筒・鼻紙入之類、何品にてモ絹袖以上之切に花菱之品、急度停止ニ申付候。

一、庄屋より以下一統、麻上小巾着用候様。

一、仮子之儀は、矩衿等決而着用不申候様、綴差小巾の短物相用候様。

一、在り婦人冠物、唐風呂敷決而相用不申候様、古束の通、山すそと申候相用候様、越マ男セ共、木綿袷尺決而相用不申、是マ古束の通、麻の帯など申物相用候様。

一、家作の儀、郷士手代重立の者たり共、農家便利に相成候様取建候分ハ格別、附床・扨・切襦等ハ堅無用、是迄有未候分ニ而モ可成尤追々相改候様云々。

一、在り不斷出金ハ勿論、重キ祝儀仏事たり共一汁二菜の外差出不申候様ニ、酒肴も右に準

し随分半輕致候様、尚又村祭諸尾物或は湯治等、随分質素を相守、一切奢侈敷麗之様、右之外衣類廻りは勿論之儀、不肖何品に高直の類、決而相用不申様。⁽⁴⁾

等の制限令を出して極力出費を戒め、もつぱら耕作に従事せしめなるべく奨励してゐるが、この令が守られない旨の令が程なく出ており、むしろ形式的なものにすぎなかつたようである。右は勸農の爲の統制策で間接的なものであり、必置以上の節約を強いて唯農家の又に従事せんとするものであるが、次に農村行政の實際面について及てゆく事とする。

(三) 備荒貯蓄

農村の振興をはさむべく、藩外より借入や藩内重立の者の出金によって窮民救済に當つた事は既述の通りであるが、先ず以て再び凶荒による被害を惨なからしめんとして企てた施策は備荒貯蓄の制であつた。荒後未だ回復の成果あらずりあられない天明後期には、意圖する所あるも果さなかつたが、寛政に入つて三年十一月備荒の制を定めて郡内に郡倉を建て、高拾石ニ付米三斗積りで集めた。

これは續く四年は攝毛新古田共に五歩三厘という凶作に災ひされたりして円滑にはこばなかつたようであるが、豪農等には私藏で備蓄藏を建てたる者があつたりして、次第に整つていき、五六年頃迄には大凡整つたようである。

今一例として鯨ヶ沢の貯米についてみれば、ここでは寛政三、四、五の三ヶ年にわたつて御下金によつて百八拾八俵貯之置き、六年には錢納で四萬貳百四拾目取立てゝいる。しかし八年に至つて貯米が蒸米となり、爲にそれを処分するに當り「貯米売れの儀は、後々其差障に相成候に付右貯米亦石組中之相渡、当秋糶に而相納候様」にしたいと申し出たのに対し、米は赤石組へ差遣わして秋に糶で納めさせるようにし、錢は藩代組へ遣わして秋に糶で出させるようにしている。この後に「六ヶ年以前の米貯置候儀、緩急の取扱に有之候の向、以来右体の儀無之様」としているが、如何に備荒貯蓄について嚴重な取扱方を命ぜられていたかを知りうるが、この備糶の爲の割当が農民にとつて苦痛だったのも又事実であり、農民に難儀をかけ

るのを軽減する爲に十年五月に次のような寛を出した。

去成在々貯米之義、在方格別難淡之趣達御座、当秋貯米不及相納旨被仰出候、尤来秋々高拾石ニ付壹年の價を以郷藏之納候様、且年々豊凶に寄、或者半納、或者休年可申付旨被仰出候、夫々可被申達候以上。

これによつてみれば、納めない年の分は翌年に繰入れて納めさせていたらしく、窮民救済の爲のものが逆効果を招くに至つてゐる事がわかる。

(四) 藩士土着と農民

藩士土着が農民に与えた影響は大きい。それだけでなく、代官の廻村やその他役人の在下りの裏に、人馬の微発や接待などで難儀一方ならなかった。それが藩士土着により弘前との往来が多くなるにつれ、その負担は更に加わつた。藩としては、元々家士救済が主目的だったとは云い乍ら、これに在方の諸政風俗の取締、監視の役目を持たせた事当然である。しかし在屯当初よりが之つて農民に難儀をかける者が多かつたので、藩では土着士

が熟一の爲置私するに際し、規定以上の人馬徴發を禁じ、又自分所用の節は、往來の村所で人馬を勝手に出させぬよう令したり、御用私用の書狀を村継宿從て出す者多い爲、御用狀以外のそれを停止させる事とした。また耕地の占居に當つては、既に百姓が經營し收納滞りない土地を取り上げない等、人夫の使用に當つても仲商錢の名目で、高十石に付百目くらいつの納めさせ、それで諸用をまかない、普請作事その他勤仕に差支えるような場合を除き、別段人夫を出させぬ事、又諸族の割付に當つても、よく／＼百姓の事を考へ、納め難いものを無理に納めさせる事のないよう、尋々極力百姓に負担のかゝらぬよう、疲弊にならぬようと令を発しているが、これはあく迄も規定以上の部分についてで、これ以前に難儀が多かつたといふ事は勿論の事である。右のような令が出てゐるのは、そのような所行の多かつた証左であらう。

(五) 開墾に關して

農村に關しての政策中、何といつても大部分を占めるのは、如何に多くの收穫をあけさせ、如何に多くの年貢を取立てるかという事であり、それ

は又田地の取扱ひに關してくる事である。しかし凶作後、特に天明三年の大凶作にあつて過半の耕地を荒らし、耕作民減少の後に於ては、如何にして旧に復するかが問題であつた。兎に角、耕地を耕す農民が少ないのであるから他にこれを求めねばならず、財政が苦しいといつて以前に増して課税する事はおろか、逆にこれを援助すべく他領より米を入札、或は幕府、上方の豪商、藩内の富商重立の者より借金し又は献金を仰ぎ、これを農民に支給して現に荒れてゐる土地の荒廃を防ぎ、更に荒廢地を墾墾せしめねばならないという状態に置かれた。従つて先ず以て領内の農民に保護を加へて、離散者を増加せしめないようにし、一方離散した者へは歸參を命じ、他領へは人を遣わして移住者、幸公人を集めて領内の人口増大に努め、その場合旅費を給し、集まつた人々をそれぞれ然るべき荒廢地に配置し、夫喰米錢を給し、反別に手当米を給し、住居を与へ或は建取の爲の手当錢や木材を給して開墾に専心させた。その場合勝手に領内に入つて開墾に従事し乍ら着の管轄外にある者多かつた爲、これを調査して年貢の増大をは

かり、一応の人数を集めて開墾の成果がみられるに至つて戸口調査を行い、在方より農業を営んでゐる商人になつた者や、他領より帰つた者並びに移り住んだ者で町方に入り込んだものを、なるべく在方に住まわけて農業に従事させるようにした。開墾地をよく増した者は賞金を与える事とし、庄屋を始めとして大いに督励した為、開墾地は次第に増大した。しかし続く凶風水害の為に、再び荒地になるものが多く、その度に新たに元の荒地同様の手配をせねばならなかつた。農民の土地を離れる者は相変らず多かつた為、耕作の容易なる地域は比較的開墾もはかどつたが、悪条件なる地域は容易に開墾が進まなかつた。

今寛政期の農村行政について、特に開墾に關して、それ迄の施策を基として建てたと思われる寛政十三年の郡奉行を始めとする開墾方の具申案をあげ、それを基として少しく考察してみようと思ふ。先ず郡内の荒田畑開墾がはかどらぬのは人不足の爲であるから、他領で人の多くある場所より人寄をする事にし、離散者の帰国をうながし、帰国

人には老人につき老幼を問わず独立出来る迄一日米一升五合を与へ、農業の出来ない者は銭貳拾目に米五升を与へ、家業は勝手に任せる。在方へ住む者は右以外に開墾補助費を給する。各村々租々の労働人口と耕地面積には不均衡ある故、人多き場所より荒地多く人少なき村へ居移しをさせるが、強て移してはかえつて騒立て故障もあるので、納得の上で開墾に従事させる事、自百姓は開墾増になつても、諸親役多い為、諸親役等納めぬ在方の商戸高無の者を人夫として使わせる事、開墾がはかどらば「御元入損ニ後相成候振台出来之儀難斗尋存候向此度之儀御手厚之振方ニ被仰付居移歸國等之由永く其郷里ヲ安し仕居任候様、」にする為、自百姓開墾には番及歩に付御手当米六斗を給し、二年間無年貢にし三ヶ年目より本納させ、五ヶ年間諸郷役を免除する、歸國人開墾は番及歩に付御手当米六斗で三年間無年貢にし、四年目より三年間は見取米上納、七ヶ年間諸郷役御免にする。居移しの者は遠近により御手当を支給する。用水堰の普請を仰付ける。

荒畑が多くなつてからは、「御検地人見分之上、高反別吟味方候御相成致、荒田畑之儀は兎分不被仰付、諸品成田畑并、所々之通り御検地人見分被仰付候、依而右荒田畑之分者、何れ在方申出を眼目ニ仕、御裁圖更目録相発候事、」との方針をとり、一町の内七反程の荒発をなしても五反などと申出ている者もある故明細に調査したい、等々の事を郡奉行等から申し出ている。これは寛政十三年一、二月の藩日記に見られるものであるが、實際に行われていたのは十一、二年頃からではないかと思ふ。十年の五月に藩士と番が止められ、その後土地の取りやめ等の爲に新に南発役を任じている事などからも窺われる事である。十二年三月の藩日記に「郡奉行申出候高杉組小嶋村の者共、極端につまみ荒田畑の通算被仰付、」とありて「諸郷役之儀、前々撥合を以て毎年五カ年の同一切御用捨被仰付、其分高杉組中にて引摺相勤候様」とあるのを取ても、その時々に応じとられて来た策を正式に認可して貰つたものと思われる。他にも村位、田位の位下を希望する申出も多く、大光寺組荒田村では村衰微の爲、式拾ヶ年にわたる

村位下位の要求に対し、拾ヶ年を認めてほしいとの郡奉行の申出を断り、米銭の半当を給してあり、又前田屋敷境松面村などは、享保年中に五歩成下、安永年中は一ツ成下や半当米を給されていたが、安永五年より半当米を下さないでいたので、遂に困窮し、村成立たぬ爲一ツ成下にしてほしいといふのに対して、「御検見引方、年々平均仕候處、式カ村之儀引多有文とも無御座程に御半当米引上り、既に式拾年余之内相続候ニ付、此節成下が難仰付旨、」を申し續けられている。以上をみて解る事は、奥地に取した振い方をしていないという事である。

既に開がれている田畑が又荒廢したり、せつかく帰國人や居移しの者を入れても土地の増大が停滞し、南発を割付けても、或る者は半分、或者全然南発に手をつけないという者もあり、その分が村方に負担となり、村衰微の元ともなるのであつた。ここに藩では畢竟御寺当を増額し、その他諸郷役を逐年免除して南発助成する事の得策たるを考へ、前記のような以前に比べてかなりいい条件で南発させる事となつたのであつた。その後手当

米は八斗に増され、大いに凶荒を奨励しているが、藩が如何に人集めに苦心したかは次の事からも知りうる。即ち、三奉行が、帰国人と共に農業に従事せず御費になる者は差留めたい計であるが、そうしては他領へ赴いたのに及し、入人が少なくなつては大変であるから、当一ヶ年の所はこのままにし、後で取調べ親民の多い場合は明年より差留めたい、農業せぬ者が町社に入つても奉公人不足の事であるから、右の錢にもなる故許すようにしたい旨の申し出をしてゐるのを、そのまゝ認めてゐる。要するに耕作人口を得る為には以前に禁止してゐる事柄を自から破らざるをえなかつたわけであるが、その為には兩藩の方は以後促進される事となつた。

註

- (1) 組は幾つかの村よりなるものであるが、貞享四年總新検地後に廿五組としてゐる。
- (2) 県史九四三(一七頁)
- (3) 要記秘鑑 (県史引用第三卷六一四頁)
- (4) 〃 〃 (〃 〃 〃 四六八頁)

- (5) 要記秘鑑 (県史引用第三卷六九一十頁)
- (6) 下村下々田の石盛(一反につぎ、およそ五斗)に足りない場合は年貢を取り立てず、右以上の場合には半分以上納となっている。
- (7) 三里以内引越の者で一人より三人迄のものへ三十目、四人以上は五十目、三里より五里迄は一人より三人迄は五十目、四人以上は七十目、十里以上から移る者は帰国人同様に扱ふ事となっている。
- (8) 寛政十三年一月の令によれば左須組では一、四町余、水造新田で十六町九反余が自百姓、帰農帰国人に割當られていないが、兩藩されてゐない。

結論

商品貨幣經濟の浸透による自然經濟の崩壊過程にあつて、次第に藩費が増大し、それが農民に過役となつて現われるのは當然の事であつた。藩の誅求と高利貸資本家に痛めつけられ、離村他出する者、漸次増大の傾向をたどる中に、連年のよう

に及り凶作飢饉に、農村は荒廢していったが、天明三年の大凶作後は一段と激しさを増した。財源を確保すべく、その為には藩政としての策は当然の事乍ら、荒地の開發とその為の人畜策であった。しかし人集めの為には、以前藩自身が禁じていた事を自から破らねばならない結果となつた。かくて城下町への人口集中も、仕方への商人の流入なども防ぎえず、再び禁じた場合は藩自身が支ええるという奇現象を呈していた。歸國人による開發が行われても、隠田となしてゐる者が多く、田畑の生産状態を明確に把握出来なかつた為、農民への補助は実情に即さず、大して効果をあげえなかつたといつていい。寛政末期に至つて新たに人畜策を講じ、更に手当を施してゐる事から及び、それ迄の煽参者や他領からの移入者による開發が滞つていた事が推察されるのである。

大凶作の後、備糧の制をたて、凶作に役立せようとしたが、その不当な割当の爲に少なからず農民に難儀をかける事にもなった。又煽参者や移居者による荒産田の開發の費用は、当然他の自治村に転嫁されたと思われるので、一方に於ては逆に

これらの百姓を余計難儀に追い込んだともみられる。要するにこの時代の農民政策は、前代に引続き、農民生活の向上を阻止する為に商人の在方に入るを禁じ、農民の城下町への流入を禁じ、極力耕作にのみ従事せしめて、封建制度の維持に努めようとしながらも、自からそれを破るような藩士土着を行わねばならず、又人寄の爲に藩内に禁じてある事を黙認せねばならなかつたといふ事から、一貫性を欠き、矛盾の多いものであつたといえよう。以上農民政策については、格別特殊なものは見出せなかつた。今後の研究により、いささかでもこれを補いたとて思ふ。

〔参考文献〕

- | | | |
|---------------|---------------|----------------------------|
| 津輕藩日記 | 青森県史 | 近世農民生活史 |
| (児玉幸多) | 西津輕郡史(佐藤公知) | |
| 津輕興業史 | 津輕平野開發史 | 近世日本の人口構造(南口直太郎) |
| | | 日本經濟叢書の中、本佐録・民間省要・經濟録・政談・等 |
| 農村社会史論叢(小野武夫) | 日本封建農業史(古島敏雄) | 近世社会(新日本史大系) |
| 徳川十五代史(夢四篇) | | |